

【緑地を楽しむ本】

『落ち葉』

平山和子 文と絵 平山英三 構成と写真

福音館書店 (2005年)



舗道を歩いていると、何か、ひらひら・・・あ、カツラの葉。この黄色い葉が朽ちて茶色くなる頃には、良い香りがあたりにただよってきましょ。ニレの木も、落ち葉に少し赤みがさしてきました。

こんな季節にピッタリの、平山和子さんの『落ち葉』

を読んでみました。黒姫山のおもとに住んでいる平山さんは、林を散歩していてふと一枚の落ち葉に目をとめました。朱の中にわずかに緑が残っている、美しい落ち葉。この落ち葉もまわりの落ち葉と同じようにやがて色あせていくのだろうか、そう思った時、平山さんは落ち葉を描き始めていました。

平山さんに描かれた落ち葉はどれも虫に食われて穴だらけだったり、なんども凍ってはとけてポロポロになったりしています。天気の良い、明るい林道に落ちていたような葉もあれば、水の中で色が変わり、朽ちていこうとしている葉もあります。でも、どれも美しい・・・。

春の花の美しさは、虫たちにアピールして花粉を運んでもらうためのもの。では落ち葉のこの美しさはどうしてなのでしょう？ 何のためでもない、「生」を生ききったあとの葉の尊厳、そのようなものが枯れ葉の中ににじみ出ているのではないのでしょうか。絵本に描かれた落ち葉のような最後を私も迎えたい、そっと、そんなことを思いました。

平山さんは今もひたすら落ち葉を描き続けているそうです。原寸大でていねいに描かれた落ち葉たちは、あなたの心に何を語りかけてくれるでしょう。

(小川)